

長野県立歴史館たより

2015年 秋号 vol.84

特集—秋季企画展

樹木と人の交渉史



樹木と人の関わりは樹木の木陰を利用したり、木の実を得る、倒木や流木を木の棒として利用する程度から始まったと考えられます。その後、日本列島では3万年前の石斧出現によって樹木は伐られ、木材利用の対象になりました。また、原生林に人が手を加えたことで、樹木との新たな共生関係が作られようになりました。

一方、人は樹木を使うだけでなく、巨樹などを信仰の対象にすることで、保護も図ってきました。

本企画展では、樹木と人の3万年に及ぶ関わりあいの歴史を、遺跡から出土した木製品と巨樹や御柱、木造仏への信仰を通してみていきます。

㊦ エントランスから始まります㊦

今回の展示は、エントランスゾーンから始まります。ガラス越しに広がる中庭の樹木群を背景に、巨樹にまつわる伝説パネル、巨木柱模型や、御柱をご覧ください。樹木(自然)に対する信仰が、巨大な木柱や木造建築物(文化)へと受け継がれる過程を示します。

㊦ クリ・ナラ林と定住生活㊦

樹木と人の関係に大きな転機が訪れたのは、



新潟県分谷地 A 遺跡出土 朱漆塗り木製容器(縄文時代)
新潟県指定文化財 (胎内市教育委員会蔵)



長野市松原遺跡出土磨製石斧
(伐採具・加工具：当館蔵)

縄文時代早期から(約1万年前～)です。温暖化で広がった広葉樹林のもと、人はドングリ類の恵みを受けて定住化を進めます。縄文時代前期以降には、樹木から果実や薪を得るのではなく、建物の柱やウッドサークルといった構造物を作るために大木を伐採・加工するようになりました。文化が発展することによって、樹木との関係が新たな段階に入りました。新潟県胎内市青田遺跡出土の柱材(クリ)を、その象徴として展示します。

さらに、人は集落周辺の樹木を管理するようになり、植生が変わっていきました。その中で、種実や木製品の出土数を増やすのがクリやウルシなど、人にとって有用な樹種でした。新潟県胎内市分谷地 A 遺跡出土の漆塗り容器(写真左下)は、縄文人のウルシ木管理と、その樹液を利用する高度な技術の存在をあらわしています。

㊦ 低地林を伐りひらく㊦

千曲市屋代遺跡群では、弥生時代中期(2,000年余前)の水田開発に伴い、低地の樹木が伐根され、焼かれた状況で出土しました。また、後期には、伐採・加工具である磨製石斧が長野市

榎田遺跡・松原遺跡で大量生産され、西日本からは鉄斧(佐久市北一本柳遺跡)が持ち込まれました。樹木の伐採は、耕地化が進むのと同時に速まっていました。

低地林伐採の一方、急増するモモ核の出土例やクリの埋没林から、栽培技術の進展もわかります。

また、古墳時代の有力者の墓である古墳の上に立て並べたものは、埴輪のイメージが強いですが、山梨県甲府市甲斐銚子塚古墳(写真下)や、奈良県橿原市四条古墳の出土状況から本来は多くの木製品で飾られていたことがわかってきました。

🌿木材消費の拡大と再生への祈り🌿

飛鳥～奈良時代(約1,300年前)、新しい国家建設を目指して、宮都の整備と山野の開発が進みました。埴科郡の中心地と考えられる屋代遺跡群でも、官衙や寺院といった大型建物建設、文書行政確立に伴う木簡や律令的祭祀に伴う木製祭祀具(巻頭写真)などに、大量の木材が使われるようになりました。さらに、周辺山地では須恵器を地元で生産するため燃料材が必要となり、平野部では耕地のさらなる拡大のために低地林が失われていきました。

屋代周辺では、弥生時代から続く伐採によってモミが減少し、そのかわりにサワラ材が多く使われるようになっていきました。

一方、消費された木製祭祀具は水辺へ流れ、自然に還されました。木製形代や木札を利



甲斐銚子塚古墳 木製品出土状況(古墳時代)
山梨県指定文化財 (山梨県立考古博物館蔵)



溪斎英泉《木曽街道萩原 鳥居峠 碓氷清水》(木曽路美術館蔵)

用した祈りは、室町時代の千曲市東條遺跡の蘇民将来符木簡、そして、現代の松本市の七夕や、長野市の小正月行事などにも受け継がれてきました。

🌿柴山・草山と木霊🌿

中・近世、使える木が伐採された跡地に広がったのはマツでした。江戸時代、マツは肥料や燃料材として利用される一方、信仰の対象や名所の景観木として残される例も多く認められます。

溪斎英泉の錦絵(写真上)は、当時の一般的な景観として、高木がほとんどない山、柴を背負った人、そして旅の目標木としての松が象徴的に描かれていたことが読み取れます。

乱伐の時代においても、素材を活かした一本造りの神仏像によって、樹の霊を生かす考えがあったことを円空の作品を通して紹介します。特に本展では、これまで公開される機会が少なかった木曽の円空仏などを展示します。

🌿樹木と人のはてしない物語🌿

人は、樹木をモノとして利用する一方で、こちらの支えとして保護もしてきました。こうした関係は、現代、そして将来へも続くことでしょう。

写真展示では、現代の取り組みとして、岩手県陸前高田市高田松原におけるマツと人の共生の歴史と、未来につなぐ再生への動きを紹介します。また、来年度長野県で実施される全国植樹祭の取り組みなども併せて紹介します。

考古資料をよむ 「向六工遺跡出土 戦国時代黄瀬戸皿」



みつかった 11 枚の黄瀬戸皿

当館に所蔵されている考古資料は、その多くが、昭和から平成にかけて、県内で盛んに行われた高速道路や新幹線の建設に伴う発掘調査によって得られた資料です。

写真の資料も、1989年(平成元)に長野自動車道建設に伴い調査された、東筑摩郡旧坂北村(現筑北村)^{むかいろつく}向六工遺跡からみつかりました。

調査では、戦国時代(15～16世紀)に営まれた集落跡が確認されました。集落には、複数の建物を柵で囲った建物群が3カ所あります。建物群は、30～50mほど離れていますが、井戸は一つしかないので、3つの建物群が共同で使っていたと考えられます。

遺跡からは、^{るつぽ}埴塙などの鍛冶道具がみつかり、集落内で鍛冶作業がおこなわれていたことが明らかになっています。

戦国時代、武器・武具の需要の高まりから、有力武士の館跡近くには鍛冶跡など発見例がみられます。遺跡周辺は青柳氏という地元武士が勢力をもっており、青柳氏の本拠地は、遺跡からわずか1kmの距離にあります。みつかった集落跡も青柳氏と関係する可能性が考えられています。

11枚の皿は、建物の内部に掘られた穴から伏せて重なった状態でみつかりました。ほとんど割れていないことから、捨てられたのではなく、

埋納されたものと考えられています。

陶磁器を埋納する理由として、古くから財産



皿がみつかった様子

としての隠匿や貯蔵、建物などの地鎮、墓などへの副葬などが考えられています。ただ今回の例は、いずれかの説を裏付ける決め手が無く、理由は確定されていません。

これらの皿は、16世紀前半に瀬戸美濃地方で焼かれたもので、全体に黄色がかっていることから「黄瀬戸」とよばれています。

11枚中9枚には中央に「カタバミ」の花をかたどったスタンプが押されており、大きさも直径約9cmとそろっていることから、同一時期に同じ窯で生産された可能性が高いと考えられます。

同様の皿は、県内でも数多くみつかり、ごく一般的に日常の雑器として生産・流

通していたものですが、黄瀬戸皿をまとめて穴に埋納する例は、県内には他になく大変貴重な発見例です。



カタバミのスタンプ

文献史料をよむ 明治・大正期の知事事務引継書を読む

当館は、明治初期から現代に至る長野県が作成した行政文書を所蔵しています。そのうち明治初期から1946年(昭和21)までの10,783冊(点)が、2008年(平成20)に長野県宝に指定され、長野県の近代史を考える重要な史料になっています。その中から今回は「知事事務引継書」を紹介します。

現在の都道府県知事は選挙によって選ばれますが、明治～昭和戦前期には中央政府によって任命された知事が派遣されました。在任期間は1年～2年程度が多く、かなり頻繁に交替が行われていました。

明治政府は、1873年(明治6)7月に「府県事務受渡規則」(太政官達第39号)を制定し、府県の長官(知事)が交替した際に、「知事在職中の事務や今後の課題を詳しく記した書類を作り、前任者から引き継いだ書類と在任中に扱った「諸簿冊等目録」を添え」(意識)て事務引継書を受渡すこと、終了後に太政官正院(のち内務省)ならびに大蔵省に届けることを義務づけました。この規則は、昭和戦前期まで効力を有し、戦後の「地方自治法」施行後は、同法159条等で事務の引継が規定されました。現在でも行われている「事務引継」は明治初期に起源があり、戦前と戦後では法的根拠は変わりましたが、一貫して知事交替に伴う重要な業務であることがわかります。歴史館にはそのうちの一部、19冊が所蔵されています。

長野県は1876年(明治9)に発足しますが、事務引継書で現存する最古のものは、1890年(明治23)1月の木梨精一郎から内海忠勝の交替に際して作成されたものです。引継書の筆頭には知事官房の引継項目が「一 聖上御真影 壹枚」「一 縣印 壹顆」「一 勘合印 四顆」「一 縣官職員録」以下、「一 飛信切手 但支払帳添 壹箱」まで22項目にわたってあげられています。天皇

の御真影や県の印鑑などが最重要なものであったことがわかります。これに続く文書課の事務引継調書のなかには文書の名前を記した帳簿が196冊あり、また長野県が出来て以後の「公文書と書籍の目録」が別冊として備えられているのが注目されます。ただ、残念ながらこの目録は現存していません。

これ以後の知事引継書に記された県全体の保存文書数の推移についてみると、その保存数が見える最初は、1914年(大正3)の依田知事から力石知事への引継の際で、第1種(永年保存)12,106冊、第2種(30年保存)521冊、第3種(10年保存)2,514冊のあわせて16,019冊です。これ以後、知事引継書の保存文書数をみると、例えば、第1種～第3種の合計の数字で、17,624冊(大正10年引継書)、22,445冊(大正15年引継書)、31,720冊(昭和10年引継書)などと、時代が進むごとに保存文書数が増え、その数量が把握されていることがわかります。これ以後、保存文書数が知られる知事引継書は今のところ歴史館にありません。このように知事交替に際して県全体の保存文書数が把握されていたことが読み取れ、文書保存に対し並々ならぬ努力をうかがうことができます。

知事事務引継書には以上のほかにも県庁各課についての引継事項が記されており、当時の県政の内容を理解する絶好の資料といえます。



1921年(大正10)の知事事務引継書(右は表紙)
前任赤星典太知事から後任岡田忠彦知事への引継書

研究の窓 1945年に千曲市内に移転してきた陸軍機関

1944年(昭和19)11月に、米軍の戦略爆撃機B29による本土空襲が始まりました。大きな被害を受けた関東地域の陸軍の兵器研究や物資を集積・供給する機関は、地方への移転を余儀なくされ、翌年2月から作業が始まりました。長野県にも数多くの軍関係機関が移転してきました。

長野県立歴史館がある千曲市をみてみましょう。立川市の研究施設が大きな被害を受けた第5陸軍航空技術研究所は、45年2月17日に「屋代出張所」を設置しました(陸密第573号 軍需動員関係部隊ノ出張所等にノ名称及位置ニ関スル件中改正ノ件達【C01007867800】)。業務は、航空計測器や光学関係の研究でしたが、8月の現況報告に「概 機械工事未完了」とあり、移転は完了しなかったようです(陸軍航空本部「陸軍航空兵器審査研究ニ関スル資料 昭和二十年九月【C13120846200】)。具体的に「屋代町」のどこに移転したかは記載されていません。しかし『屋代高校百年史』に、旧屋代中学校本館3階に「第5海軍航空技術研究所」が常駐し、軍関係者以外の出入りが禁止されていたと記されています。「海軍研究所」が「陸軍研究所」の間違いだとすれば第5陸軍航空技術研究所は旧制屋代中学校に置かれたことになります。

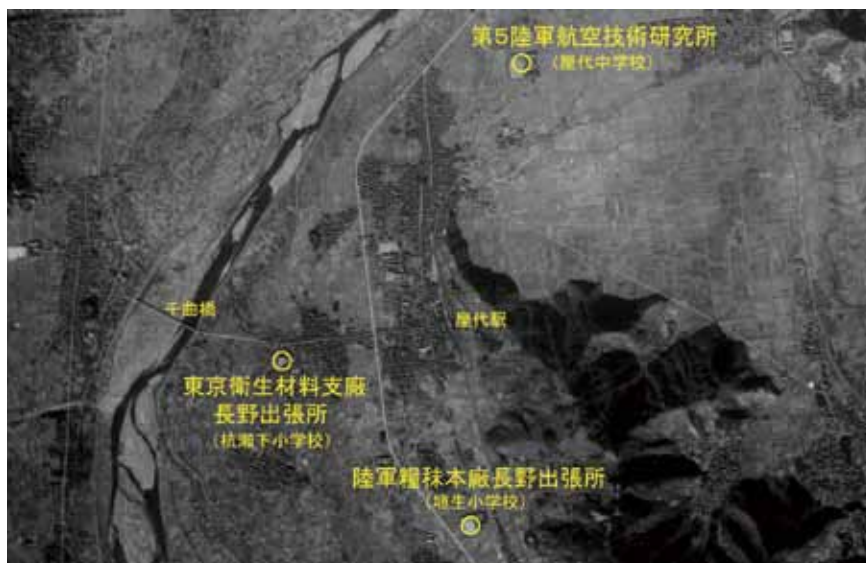
このほかにも、衛生材料の整備や貯蔵、補給、輸送を業務とした東京陸軍衛生材料支廠長野出張所が「長野県埴科郡杭瀬下村」に置かれています(陸密第3296号 海運器材の名称、区分、類別並機(秘)密取扱区分等に関する件陸軍一般へ通牒【C01007870400】)。軍関係

機関が学校を施設として利用したことが多いことから、杭瀬下国民学校に置かれた可能性があります。また兵員の食料や馬などの軍用動物の飼料を貯蔵・補給した陸軍糧秣本廠長野出張所の軍需品が「長野県埴科郡埴科国民学校」に戦後集積されていた記録があります(東部軍管区「昭和二十年 陸機密第679号第二十條第二・四号調査表(官衙・学校)昭和20.9.15【C15010825800】)。『埴生公民時報第25号』(1950年7月5日)の「埴生町のあゆみ」に「糧まつ廠埴生小学校一部借用」とあり、「埴科国民学校」は誤記で、埴生国民学校(現埴生小学校)が利用されたことがわかります。

残っている旧陸軍の公文書から、千曲市に太平洋戦争末期の短期間に3つの陸軍機関が移転してきたことが確認できました。しかし、倉庫などを含めれば、もっと多くの移転してきた軍関係機関が、学校施設を利用した可能性があります。公式文書の多くが廃棄されたため、その実態はわかりません。

※ここで引用した陸軍文書はアジア歴史資料センターが公開している資料で、〈 〉は資料名、【 】はコード名を示す。

(原 明芳)



移転してきた陸軍機関の位置 (施設名は 1945 年当時)
国土地理院が公開する 1947 年米軍撮影写真 (USA M632 No.2-161) を使用

わくわく
ドキドキ

展示解説・バックヤード見学

「わあーすごい！ 人骨だーっ！ 本物だって！」

長野県立歴史館では、主に学校見学を対象にして、常設展示の解説と歴史館の裏側・職員のみが入ることのできるバックヤード探検を行っています。学校の見学についていっていきましょう。

常設展示解説

「なんだなんだ、動いている。大きな象だ！」
常設展示を入るとナウマンゾウがお出迎え。4万年前の大切な食料で、集団で石器を使用し、やりなどの道具を使ってしとめていました。複製のナウマンゾウがリアルに動くので、解説も生き生きと聞くことができます。臨場感100%。長野県立歴史館は体験型のコーナーが豊富にあり、頭で理解する前に、体全体で歴史資料に接することができるのです。

黒曜石でできた石器など、発掘された本物の貴重な資料と解説によって遙か昔の人びとの暮らしに深く触れることができます。

江戸時代のコーナーでは、移築された実際の農家の中で解説者と子どもたちは交流します。「この部屋にいる動物は何ですか」「へびがいる！ ネズミも！」「へびはネズミを食べてくれ

るしね。だからこのへびは、昔、家の守り神として大切にされていたんだよ」「この家の中にな、大切な部屋は何だかわかるかな？」「？？？」「便所だよ」「みんなの糞尿は貴重だった。売り買いされていたこともある。何に使ったのかな？」「肥料…？」「そのとおり！」子どもたちは目を輝かせながらわくわくするやりとりを楽しみ見学しています。

バックヤード探検

今からおよそ3,500年前の縄文人骨が北村遺跡(現・安曇野市)で発見されました。縄文人骨は普通溶けてしまって、長野県での発見例はほとんどないため、大変貴重な資料です。骨が残ると、性別、年齢、身長、また生前何を食べていたかが推定できます。子どもたちは、目を見開いて興味津々の様子です。

縄文時代と弥生時代の土器も実際に持ち上げて比較し、重さや触感を実感します。ザラザラどっしり…。あれっ意外に軽い…。

歴史館では教科書や一般的な歴史書だけでは学べない歴史の奥深さを体感していただけるように、職員一同さまざまな工夫をしています。



江戸時代の農家で、クイズを楽しみ、解説に聞き入る子どもたち



縄文時代の人骨に見入る子どもたち

■2015年(平成27) 9月～12月の行事予定



9月	戦後70年企画	講座・イベント
休館日 1・7 16・24 28	長野県民の1945 一疎開・動員体験と上原良司ー 2015年7/25(土)～9/15(火) ■証言「戦争体験を語る」 9/5(土)、9/12(土) いずれも13:30～15:00	古文書講座(通年受講生) 第3回 初級A 9/6(日) 初級B 9/17(木) 中級A 9/5(土) 中級B 9/17(木) 第5回 上級 9/26(土)
休館日 5・13 19・26	秋季企画展 樹木と人の交渉史 2015年10/3(土)～11/29(日) ■講演 10/3(土) 13:30～15:00 「信濃の森とヒトのつきあいの歴史」 講師 鈴木 三男 氏 (東北大学名誉教授) ■講座 ①10/11(日) 10:00～11:00 13:00～14:00 「実演! 国宝・重要文化財の屋根材(こけら板)をつくる」 講師 栗山 弘忠 氏 (栗山木工有限会社) ②10/31(土) 13:30～15:00 「縄文時代の樹木利用」 講師 寺内 隆夫 ③11/7(土) 13:30～15:00 「(仮)弥生・古墳時代の木工技術と保存・復元処理」 講師 白沢 勝彦 ④11/21(土) 13:30～15:00 「磨製の斧は伐採具か」 講師 大竹 憲昭 ■イベント ①10/11(日) 11:00～12:00 14:00～15:00 「『こけら板』に字を書いて、古代の木簡をつくってみよう」 (協力: 栗山木工有限会社) ※小・中学生と同伴者対象 要予約 ②10/24(土) 9:00～12:00 「森将軍塚古墳の樹木観察会と、自然素材クラフトづくり」 (協力: NPO法人 やまぼうし自然学校・千曲市森将軍塚古墳館) ※小・中学生と同伴者対象 要予約 ③11/28(土) 13:30～15:00 「木の実で飾ろう! クリスマスリースづくり」 ※小・中学生と同伴者対象 要予約	古文書講座(通年受講生) 第4回 初級A 10/4(日) 初級B 10/15(木) 中級A 10/3(土) 中級B 10/15(木) 遺跡探訪会 10/17(土) 「ヒスイ原産地遺跡を訪ねる」
休館日 2・4 9・16 24・30	古文書講座(通年受講生) 第5回 初級A 11/1(日) 初級B 11/19(木) 中級A 11/7(土) 中級B 11/19(木) 将軍塚まつり講座 11/3(火) 「屋代遺跡群周辺の森林開発」 講師 中野 亮一 第4回考古学講座 11/14(土) 13:30～15:00 「樹木と人の交渉史」 講師 寺内 隆夫 出前巡回講座 「やさしい信濃の歴史講座」 11/21(土) 10:30～12:00 会場: 松本市立博物館 近世史セミナー 11/28(土) 10:30～15:40 研究テーマ「災害に向き合う地域社会」	
休館日 1・7 14・21 24・27～31	冬季展 地図の「明治維新」 2015年12/19(土)～2016年2/28(日)	出前巡回講座 「やさしい信濃の歴史講座」 12/5(土) 10:30～12:00 会場: 松本市立博物館 やさしい信濃の歴史講座① 12/12(土)

表紙の写真の解説

《屋代遺跡群出土木製祭祀具》 当館蔵

7世紀末に、小河川脇の凹地にまとまって捨てられた木製祭祀具で、人形4、馬形1、斎串7本のセットである。隣接する場所からは斎串だけのセット、人・馬がなく蛇と斎串だけのセットなどがあり、祭祀の内容に差があったことをうかがわせる。いずれも祭祀終了後、川に流した。

行事アルバム

「戦後70年企画講演会」から

7月25日(土)



講演の様子

当館講堂にて戦後70年企画講演会を開催し、長野県短期大学学長・上條宏之先生から「長野県と県民の1945」と題してご講演いただきました。終戦前後の様子を当時の村長等の日記や県政の様子、軍隊の配置など多様な視点からご紹介いただき、参加者は真剣に聞き入っていました。

「歴史館で夏休み」から

8月1日(土)・2日(日)



バックヤード探検



石のアクセサリーづくり

真夏日となりましたが、2日間で300名を超す参加者がありました。石のアクセサリーや粘土の古銭マグネットをつくったり、歴史館のバックヤードを探検したり、縄文人の衣装を着たり、実物の土器や黒曜石にふれてみたりと、それぞれのイベントを大いに楽しむ姿が見られました。

長野県立歴史館たより 秋号 vol.84

2015年(平成27)9月2日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
 電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
 E-mail rekishikan@pref.nagano.lg.jp
 ホームページ http://www.npmh.net/

印刷 富士印刷株式会社